

教 育 開 発 機 構

NEWS LETTER

2019.Dec.Vol.4

学生との協働によるFDの意義とねらい

副学長(教育担当)・教育開発機構長 皆川 勝

今、本学は90周年を迎え100周年に向けて、「ボーダーを超えて、学生と教職員が共に考え、学び、行動することで社会に貢献できる人材を育てる」という教育理念のもとで教育改革を推進しています。「公正・自由・自治」という建学の精神をお題目に終わらせることなく具現化する覚悟を、この教育理念が表しています。

大学教育において学生は、これまでは教職員が決めたルールに従って教育を与えられる立場でした。しかし、これからは、協働の中から新しい学習教育システムを作り上げてゆく必要があります。「私たち抜きで私たちを語らないで!」で知られるラテン語の格言“Nothing about us without us”における、“us”を“students”と言い換えて、これを実践することが求められています。

ここで重要なことは、「自由」と「自治」に関する考え方

であろうと思います。ここでの「自由」は、freedom「束縛からの自由」ではなく、Liberty「選択の自由」です。教職員が常に意識しなければならないことは、学生たちが本学を巣立って社会人として世の中に貢献する段階で、彼らの可能性が最大限に高まるような大学教育を、ともに作りあげてゆくことです。すなわち、本学を巣立った卒業生が最大限の選択の自由を持って生きてゆけるように、在学時から「自治」「自立」を求め、主体的に学ぶことのできる人となれるようサポートすることが重要なのです。

学生との協働によるFDは、そのような大きな目標に向かっての貴重な萌芽のひとつです。この挑戦的な試みが、本学の将来と学生諸君の未来に明るい光を照らしてくれることを期待しています。

「教職員と学生との協働FD懇談会」を開催しました

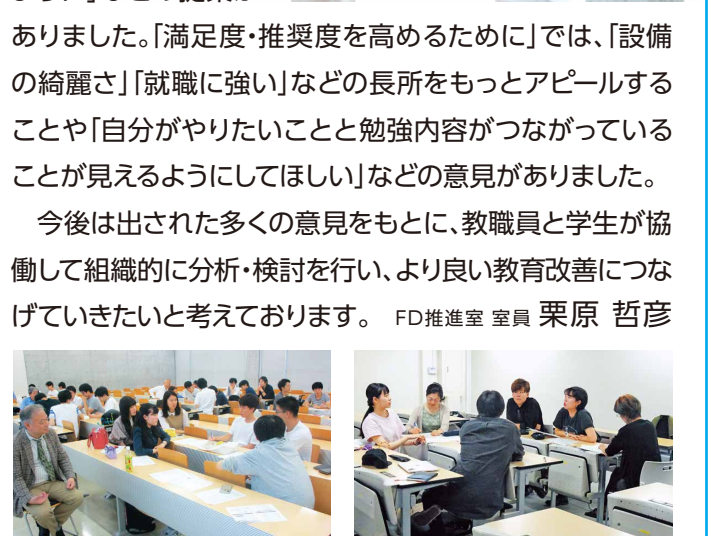
2019年9月25日(水)、世田谷キャンパス(SC)と等々力キャンパス(TC)を会場に教職員と学生との協働FD懇談会を実施しました。この懇談会は昨年9月に初めて開催し今回が2回目となりました。SCは工学部・知識工学部・総合理工学研究科、TCは環境学部・メディア情報学部・都市生活学部・人間科学部・環境情報学研究科を対象として、教職員27名と学生FD委員57名が参加しました。最初にSCでは皆川副学長・教育開発機構長から、TCでは永江副機構長から、導入を検討している数理・データサイエンス教育についての話題提供があり、次に、教職員・学生が各学科・領域に分かれて「3ポリシー」「シラバス」について現状の問題点を議論し、「満足度・推奨度を高めるために」アイデアを出し合いました。

「3ポリシー」に関しては、多くの学生が「知らない」あるいは「聞いたことはある」との回答でした。「認知度を上げるべき」「学生にとって、3ポリシーの重要性がそんなに高くないのでは」などの意見も出されました。「シラバス」に関しては、「役に立っている」「時々見ている」との回答が多く出ま

したが、「検索システムをもっと使い易く」「授業時間割からシラバスにアクセスできるように」などの提案が

ありました。「満足度・推奨度を高めるために」では、「設備の綺麗さ」「就職に強い」などの長所をもっとアピールすることや「自分がやりたいことと勉強内容が繋がっていることが見えるようにしてほしい」などの意見がありました。

今後は出された多くの意見をもとに、教職員と学生が協働して組織的に分析・検討を行い、より良い教育改善につなげていきたいと考えております。FD推進室 室員 栗原 哲彦



世田谷キャンパス

等々力キャンパス

学生FD委員になって

9月の懇談会では、授業のことにとどまらず、自分たちの学科の特色についても先生と議論することができました。いろいろな授業を受けている学生ならではの視点を、直接大学にフィードバックできるのが学生FDの良いところだと感じています。3年生になってからは大学の授業にもすっかり慣れ、受け身な姿勢になりがちでしたが、学生FDの活動を通して、改めて今、自分たちが受けている教育に積極的に向き合っていければと思います。

工学部 エネルギー化学科3年 吉岡 大知 さん



学生FDは、もっとこうすれば大学生活や教育面が良くなるのでは、という事を直接学校側に伝えられる良い機会だと思います。実際に意見交換をするうちに、埋没していた大学の問題点が浮き彫りになり、こんな課題もあったのか! と思ったり、具体的な改善の提案には思わず、なるほど…と反応したりする場面が多々ありました。学生が直接大学の教育に携われる機会はなかなか無いので、学生FDを大事にして積極的に話し合いに参加していきたいです。

環境学部 環境創生学科2年 中川 弥紗 さん



協働FD懇談会に参加して

私の参加したグループでは授業評価のアンケートを授業の途中(7回目など)に取り、後半の授業に反映させて欲しいという意見がありました。学生にとっては次年度に改善されても、自分はその授業を受講できないので、実際にフィードバックを受けられる調査のほうが真剣度が増すという、まさに学生視点の意見です。現在も様々なFD活動が行われていますが、それらの活動が教職員はもちろん学生にも、いかに必要であり有効であるかを考える場になったと思います。また、学生との協働FDでは、学生と同意見、学生と異なる意見、学生の意見を聞いて初めて気付いた部分があり、大学全体や自分自身がこれらを整理・改善し、学生に伝わるように伝えていく必要性を感じました。

共通教育部 人文・社会科学系 体育 山田 盛朗 先生 (SC会場)



今回の懇談会では、様々な気づきを得ました。教員にとっては3ポリシーやシラバスの意義・意味、使い方の理解は当然のこと。けれども、それらを十分に学生に伝えられているかという、必ずしもそうではない。春秋のオリエンテーションや授業時に丁寧に扱っていく必要があることを、懇談会后に学科で共有しました。数理・データサイエンス教育については、特に4年生から具体的な要望が出されました。卒業論文作成のためにも、統計学の基礎知識、特に保育や福祉と関わるデータの扱い方を学べる授業があれば、とのことでした。自らの学びの在り方を真剣に考えている学生の姿にふれ、児童学科の特長をさらに伸ばすことにつながる改革の必要性を、改めて強く感じました。

人間科学部 児童学科 原田 留美 先生 (TC会場)



2019(令和元)年度の全学FD・SDフォーラムを開催しました

2019年9月17日(火)に世田谷キャンパスにて、2019年度全学FD・SDフォーラムを開催し、本学教職員380人と連携協定校から高知工科大学、福井工業大学、玉川大学の教職員が参加しました。今年度は、昨年11月に開催した第2回APシンポジウムの結果も踏まえて、『学生を育てる評価方法～評価方法の多様性と学修成果可視化の促進～』をテーマに、京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授をお招きして開催しました。

開催にあたり皆川副学長・教育開発機構長から、今回は「教育プログラムレベルと科目レベルとの評価のつなぎ」と「学生の成長」の2点に着目して、本学の取組を踏まえながら松下先生に知見を授けていただき、共通理解を深めていきたいとの話がありました。

まず、教育開発機構の各担当者から「本学の教育改革の現状と課題について」と題して、卒業研究用ルーブリックの再整備と全学共通科目「SD PBL」の開講を中核とした取組状況を説明しました。引き続き、松下先生による講演「学生を育てる評価-プログラムレベルと科目レベルをつなぐ-」では、多様な評価方法を使い分けて併用・統合することで学生の学習の成果を多面的に把握し、学習や教育の改善につなげていくための考え方、科目レベルとプログラムレベルでの評価をつなぐ一つの方法として「PEPA」(重要科目での埋め込み型パフォーマンス評価)の紹介

等がありました。その上で本学の取組に対して、PEPAの観点から有効性や期待が述べられました。

講演後の全体討議では、卒業研究でのルーブリック評価の考え方、学生の省察にとって有効となる方法等についても松下先生から助言をいただきました。

最後に三木学長から総評があり、本学における卒業研究での効果や役割について課題意識を持って引き続き検討を行っていくこと、教育改革を進めていくためには本日松下先生から示していただいたような方法論や、実際の授業におけるグッドプラクティスやうまくいっていない事例も学内で共有しながら、教育改善に努めていく必要があるとの話がありました。

今回のフォーラムは、体系的で組織的な教育活動を展開する上で益々重要になる学修成果とその評価について理解を深める有意義な機会となりました。



全学FD・SDフォーラムでの質問・コメントにお答えします

全学FD・SDフォーラム後のアンケートに、ルーブリック導入やSD PBLへの不安、疑問に関する意見がありましたので、いくつかについて教育開発機構としてお答えします。

Q1 精度良く評価可能な設問設定はどうあるべきでしょうか。細かすぎると誤差が大きく平均に寄った評価になるのでは、と疑念を抱いています。

A1 その科目で身に付けるキーワードを列挙し優先度も考慮して評価項目の構成要素とします。細分化しすぎると評価が煩雑となり、項目が少ないと複数の能力を一つの項目で評価することになってしまいます。次は、粒度(段階数)ですが、まず、その科目の開講期間に到達してほしい最高レベルと、単位認定可能な最低レベルを決めます。粒度は、学生にとって能力獲得に向けて効率よくペース配分ができるように、かつ教員が採点しやすいように調整し、例えば従来の「秀」や「可」のレベルと関連付けてイメージしてみるのも良いのではないのでしょうか。

Q2 新入生の診断的評価について知りたいです。学生の成長を評価するには、スタートラインが明確でないと、その後の評価の適切性がわからないと思います。

A2 一般的には学生の学習準備状態を把握するために学期や単元の前に実施しますが、学生個々が入学時にもっている多様な能力については、学生自身も知る機会をもつことが大切です。SD PBLのような「統合的科目」の機会に4年間の最終的な到達目標(卒研標準ルーブリックなど)を示して、自分の能力をどの授業でどう伸ばすのか、学生自らが計画し確認するサイクルを回せること(TCU-FORCEなどで)が主体的な学修につながります。毎年同じ評価項目について繰り返し測定することをお勧めし

ます。教員も結果を共有し、科目間の関連や学問分野の基準も考慮しながら、課程内容と評価基準・方法を整合させ改良を加え続けることで評価の適切性が増していきます。

Q3 SD PBLで、グループワークなどができない学生は、ルーブリックが確立されるほど排除されることになるのではないのでしょうか。

A3 グループで学べない学生には適した方法で学ばせる必要がありますが、SD PBLなどの機会を利用して、チーム内で貢献ポジションを自らつくることのできる力(コツ)を身に付けて社会に送り出したいものです。SD PBLのルーブリックは、成績をつけるためというよりは、むしろ最終的な目標を明示し目標までの段階的な道筋を示して努力を促すために使います。従って、ルーブリックを設計する時には、学生自らが自分の成長を確認し努力できるように評価項目やレベルを設定し、わかりやすい言葉を使って表現しましょう。フィードバックを大切にして、主体的に努力する姿勢を支援することをお勧めします。

Q4 個別対応が必要な学習意欲が低い学生に対して、ルーブリックなどに加えて学習意欲を高める取り組みを取り上げて欲しい。

A4 まずは丁寧に原因を探ることが大切です。PBLでは自然に生まれる集団力学や、環境や道具の工夫、共感的ルールなどを利用します。「選択の機会」を作ったり、「できると思える」段階的なワークシートで支援したり、達成の喜びが想像できるような活動を埋め込むことも効果的です。来年度のFDで扱うことを検討したいと思います。

FD推進室より
お知らせ

1 3月公開FD決定! 「学生を育てる評価と方法 ~実践編~ (仮題)」
松下佳代氏(京都大学)、齋藤有吾氏(新潟大学)を講師に迎え、
2020年3月11日(水)に開催。

2 第4回 授業改善セミナー
「学生による授業改善提案」
2020年3月13日(金)15:10~16:50

シリーズ Good Practiceから学ぶ

都市の現代的課題に取り組み学際的な視点と思考を育む

末繁先生は、今年度、本学の「優秀教育賞」を受賞、2017年には学生アンケートで決まる「ベストレクチャー賞」にも輝いています。

本欄で紹介するPBL授業「まちの観察」は学生にとって初めての専門科目として、個々の関心事や気づきを尊重し知的好奇心を刺激して、自信や達成感を抱かせつつ、学部の専門へと導くための様々な工夫がされていました。

2年生100名が受講する2単位の授業で、近くの街を観察して見つけ出した課題に取り組みその成果をまとめます。講義を組み込んだフィールドワークが9回、成果物作成が4回、最終回が発表と講評という構成です。現実の社会を対象とするため単一学問体系には収まらず、社会学、民俗学、建築や空間デザイン学、統計学などをベースに学際的な視点や思考を育みます。問題

解決の過程では、1年生で学んだ理論やリサーチ手法、データ分析スキル・プレゼンテーションスキルなどを実際に使うこととなり、4人のTAとのきめ細かい学習支援、課題の段階的レベルアップと取り組み期間の適切な設定など、専門知識とスキルが統合的に身に付くように設計されています。

クォーター制導入を機に個人ワーク中心に変えましたが、やはりチーム学習は教育効果が高いことから、クォーター制に適した工夫を考えているところだとのことがありました。

(取材:教育開発機構室員 伊藤 通子)



都市生活学部 都市生活学科 末繁 雄一 先生



本学の大学教育再生加速プログラム (AP) テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」の取組では、「社会に通用する学修成果を4年間で育む仕組み」と「学修成果を目に見える形で社会に示すための仕組み」を構築していくことで、ディプロマ・ポリシーに基づく学修成果の獲得を重視した教育改革を進めています。

本学AP事業ホームページ <https://apuer.tcu.ac.jp>

TCU-FORCE活用事例 今回は都市生活学部での取組を紹介します!

「AS-IS(現状、今の姿)をしっかりさせた上で、TO-BE(理想/将来、あるべき姿)を描いてもらう」。こうした方針の下、都市生活学部 都市生活学科ではキャリア委員会を中心にeポートフォリオ「TCU-FORCE」を学生の自己理解と成長促進のために有効活用する具体的方法を考え、試行を始めています。

都市生活学科は学部設立当時から演習を通じて実践で学ぶ授業が多く、企業や自治体との協働によるPBLや海外研修、海外・国内インターンシップなど多様な体験機会が多くあります。各プロジェクトにおいて学生たちは目標を設定、実行し振り返り、自然にPDCAサイクルを回す機会に恵まれています。経験を重ねる中で、プロジェクト自体を振り返る力は徐々に磨かれていきますが、「体験の中にある自分を見つめること」、これは意識しないと一人ではなかなか難しいようです。そこで学生が教員やキャリア支援センターのキャリアカウンセラーと一緒に体験を振り返り、「自分を観て、考える」ことにより、自己理解が進むのではないかと仮説を立てています。

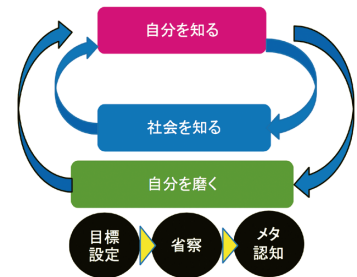
具体的にはTCU-FORCEに目標を記入し省察する作業をキャリアカウンセラーと話しながら進めるかたちです。「自分を知る」「社会を知る」「自分を磨く」という主体的な学びのサイクルを習慣にするという大学全体の取り組みの方針を踏まえ、まずは「自分を知る」ことに焦点を当て、

キャリアカウンセラーのサポートを受けながら、第一歩をスムーズに学生が踏み出せる仕組みを構築できないか検討しています。

現在は1年生や2年生を対象に教員の協力の下、キャリアカウンセラーと定期的に「自分を知る⇒目標を明確にする」セッションを行っています。7月から数回重ねた学生に感想を聞いてみると「TCU-FORCEに書き込み、キャリアカウンセラーと話しながら見えてきた自分がある」「自分のなりたい姿・理想が明確になり、目標も具体的になった。」などポジティブな感想ももらうことができました。ただ全員がこれを実施できるか、グループワークも取り入れるかなど課題も見えてきました。

等々カキャンパスでは都市生活学科を中心に引き続き定期的に実施しながら、徐々に人数を増やし、その効果や改善点を検討する予定です。まずはTCU-FORCE活用の定着を目指し、学生が「自分を探し」「自分を磨き」「未来にはばたく」ステップを踏めるよう支援していきたいと考えています。

PDCAを回せば「主体的学び」サイクルを習慣にできる



ポスターセッションに参加しました

高知大学と大阪工業大学の合同AP事業シンポジウム(2019年11月29日開催)およびテーマV全選定校による全国シンポジウム(12月22日開催)で、AP事業に関する成果や課題を発表、共有、議論することを目的として永江副機構長と小池室員の2名がポスター発表を行いました。来場者からは「教育施策に関する基本方針2020」や「SD PBL」の具体的な内容と進捗、ディプロマ・サプリメントとTCU-FORCEの開発経緯や活用状況等について質問が寄せられ、教育開発機構レターも活用しながら説明し、学外の方に本学の取組を発信しました。

